

視察用

様式(細則 5-2)

平成28年 8月 1日

浜田市議会議長
西田 清久 様

議員名 佐々木 豊治



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成28年 7月25日 ～ 7月27日
2. 視察又は訪問先
和歌山県那智勝浦町(色川地区)
高知県津野町(床鍋地区)
3. 調査経費 41,762 円
レンタカー代 12,750 円 ガソリン代 3,867 円 高速道路代 8,680 円
宿泊費 16,290 円 駐車場代 175 円
4. 調査研究活動の概要
別紙



那智勝浦町色川地区の活性化と移住・交流促進の取組

【取組の概要】

色川地区は和歌山県那智勝浦町の北西に位置する山村で、標高200から400mの急峻な山肌に9集落が点在し、鉱山の閉鎖や高齢化などで急激に過疎化が進んできた。

昭和52年に有機農業などを目指して移住してきた5家族が「耕人舎」という組織を設立したのをきっかけに定住希望者の受け入れが始まる。平成3年には地域代表による「色川地域振興促進委員会」を設立し、町立の施設「籠ふるさと塾」を通じて農業実習や体験プログラムなどを実施。官民一体の取組となっている。

・移住促進事業の内容

平成7年に旧小学校校舎を改修し、定住促進の拠点、町立「籠ふるさと塾」を整備。運営は色川地域振興促進委員会に委託している。

「籠ふるさと塾」では①体験型②実習型③定住型の3つの定住促進プログラムを実施。

委員会の活動は、定住・体験希望者の受け入れや各集落への紹介、5日間の定住体験機会の提供などを担当する「新規定住促進班」と、2泊3日で山村生活や文化を理解する機会の提供を担当する「体験受け入れ班」がある。

・事業の成果

新規定住者は人口の45%にあたる168人、73世帯にのぼる。

消防団や青年会など地域組織や活動に参加・協力している。

子育て世代などの若者の移住が多いため、保育所や小中学校が存続し新校舎も今年度新築予定。

棚田など伝統的な農山村の景観が保全されている。

盆踊りや宮祭りなどの伝統芸能は継承されている。

有機農業や農産加工品などの産業振興が推進されている。

・今後の課題と方向性

定住者への住宅や農地の確保。

有機農産物の高付加価値化やブランドの確立など産業振興と雇用の確保。

全国で移住受け入れが増加していることにより、新規定住者が減少している。

サルやイノシシなどによる鳥獣被害対策など。

・感想

当日は移住者でもある集落支援員や委員会の会長さんなどから懇談的に話を伺った。

「島根は定住促進に対する行政のレベルが高いと思っている。

仕事があったら過疎にはならない。過疎地には仕事がないので、自分で探すか起こすかしかない。それでもなんとかなると思う人が移住をしてくる。

地域を知ってもらうためにできるだけ体験をしてほしい。

田舎で暮らしたという強い動機がある人が移住して来る。

地域のために移住者を受け入れており、地域の文化やしきたりなどには協力や参加を必ずしてもらう。地域が変わるのではなく移住者が溶け込む。移住者には謙虚な姿勢で入り込んでもらっている」など。

色川地域のように環境的にはかなり厳しい状況の田舎でも移住者をよぶことができるのなら、全国どこでも定住促進の取組が推進できる可能性は大きく広がっているのではと感じた。



色川地区



研修の様子

津野町床鍋地区住民主体による地域活性化の取組

【取組の概要】

津野町床鍋地区は高知県の中西部に位置し、周囲を山に囲まれ、陸の孤島と言われ、人口減少や高齢化で集落消滅の危機にひんしたが、廃校を活用した農村交流施設「森の巣箱」を整備し、地域内外の交流をおし活気ある集落を実現してきた。

・活性化への取組

最盛期は集落内に100名あまりの児童がいたが、年々過疎化高齢化が進行し昭和59年には集落のシンボル床鍋小学校が廃校となった。

平成7年、「このままでは集落が消えるかもしれない」との危機感をいだいた集落の青年有志が立ち上がったのを機に「床鍋地区開発検討会」を発足し、6年間にわたる役場と住民との対話は100回を超えた。

平成12年「床鍋集落活性化プラン」をまとめ、プランの目玉は廃校施設の再利用とした。

約9000万円の県補助金を活用し、廃校は農村交流施設「森の巣箱」として生まれ変わり、運営は集落住民で行うこととした。

当初の運転基金として1世帯10万円、計400万円を住民が負担し、集落住民全員が「森の巣箱」のオーナーに。

「森の巣箱」には交通弱者の高齢者から特に要望の強かった「集落コンビニ」のほか、憩いの場として「居酒屋」や「温泉施設」を整備。2階は宿泊施設に。

「森の巣箱」の利用者は地域住民と集落出身者ぐらいと想定されていたが、オープンから10年を経て大きな変化がでてきた。2年目から毎年行われている「ホテル祭り」は県内外から1000人を超える人が訪れるようになり、地元住民手作りのおもてなしも話題となり評判が広がる。この施設での交流をきっかけに結婚したカップルも5組誕生し、披露宴も「森の巣箱」で行われた。

・集落福祉機能

「森の巣箱」は高齢化率が50%に迫る床鍋集落が安心して暮らしていくための大切な支え合いの拠点にもなっている。

高齢者だけでなく全世帯の安全安心を確保する「床鍋地区アクションプラン」を策定し、防災と助け合いの地域を作る。

その1つが全世帯に配布してある「お守りカード」で、各家庭の安全安心の情報を共有した見守りと助け合いの緊急連絡カードとなっている。

また、災害時のための避難訓練も全委員参加で実施されている。

JAとの協力で近くの集会場で高齢者によるししとうのパック詰め作業が毎日行われており、「床鍋式デイサービス」の形になっている。

当日は施設の代表の方から説明を受けたが、日本一幸せな集落をつくることを目標に取り組んできたと言われていたとおり、他にあまり例のない住民主導の集落づくりが行われていると感じた。

人が来ることによって住民が元気になる、日本一幸せな集落になったら移住者がくるかもしれないとも言われていた。



地域の拠点「森の巣箱」